

飯村昭子のノートブック [23]

気を勉強する大学病院の医師たち

飯村昭子

西洋医学の殿堂ともいうべき大学病院の医師たちが、治療のために気のトレーニングを受け始めた。

西と東に分かれていた医学の世界が融合し、拡大しつつある。21世紀に向けて、人間の癒しの問題は、大きな方向転換を迫られている。1月から気のワークショップを始めたオハイオ大学病院の現場を訪れた。

●ニセ医者から医者へ

オハイオ大学医学部のキャンパスに、気のワークショップが新設されたと聞いて出かけた。

毎月第二と第三の週末の午後、体育館を会場に、20人ほどの受講者を集めて講習が行われる。講師は格闘技を基本に気を編み出し、がんなどの難病の治療に取り組んでいる新倉勝美氏で、毎回ミシガン州から、弟子2人を伴って4時間ドライブして訪れる。

ナース、学生、気功に興味をもっている人、交通事故に遭って身体に障害のある人、白衣のポケットから聴診器をのぞかせた医師もちらほら。障害者のリハビリテーションに従事しているという若いセラピストたちも、真剣な表情でマットの周囲に集まり、新倉氏の指導を待っている。

車イスに座っているのは、脳卒中の後遺症で左半身が不自由な男性、その傍らに小柄なその夫人。

幸泉久子医学博士の、気についての解説でワークショップが始まった。ワークショップ開設を実現した幸泉博士は、この病院の児童精神科の臨床医として、つねに新しい治療法を追求している。気による治療を、知識だけでなく実際に関係者が研修できるようにしたいと、大学に働きかけた。

気という東洋医学の発想が西洋医学の発展に何かを寄与するかもしれないという期待が、幸泉博士たちの胸にはあった。

東洋医学書などで学んだ気実際に触れたいという思いを抱きつづけていた時に出会ったのが新倉氏だった。

ニューヨークまで出かけて自分の目と身体で新倉氏の気を確かめ、現代医学にプラスするものがあると確信し、半年以上かかって実現したワークショップだった。

第一回目のワークショップは一月の最終ウィークエンドで、ミシガンの新倉氏の道場

から、20人以上のメンバーがバスで乗りつけ、参加した医師やナース、医学生たちに気のデモンストレーションを見せた。

全員マットレスの上に座って呼吸の練習を始める。

「気は身体の内臓から出ているので、それをすくって前に出すように……」と新倉氏。彼の目には、人間の身体からわき出す気が見えるのかもしれないが、これが見える受講者はひとりもない。

見えない気を想像の目で見つ、シー、シーと唇の間から吐気音を出しながら、気を外に向けて送り出している。

「この間、ケンタッキーでやった時はたいへんでした。閉めきった会場に90人以上の人がいて、いっせいに気を出していたんです。その時遅れてきた人が、ドアを開けて入ろうとした。中に充満していた気が開かれたドアに向かって流れ、入ろうとした人が気に押されて後側に吹き飛ばされてしまったんです」

新倉氏の体の2倍もある大男の弟子のポールが、新倉氏の出す気をまともに受けて後向きに吹き飛ばされた。

一指もふれずに忍術のように大男のポールを吹き飛ばすありさまを目の前にして、見えないエネルギーの存在を認めざるをえない。

小柄な新倉氏の身体を、数人の受講者が腕を持ってかかえ上げる。軽々と持ち上げられて両足を宙に舞わせる新倉氏。

「では、気で抵抗しますからもう一度上げてみてください」

もう一度腕を取られた新倉氏の形相が変わる。眉と目がつり上がり、力んで赤黒く変色した仁王のような顔。

さっきの受講者たちは同じように彼の身体を持ち上げようとするが、巨岩のように重くなった新倉氏の身体はピクともしない。「これが気です」と新倉氏。

いきなりマットの上に正座した新倉氏。その真後ろからポールが、新倉氏の頭の上めがけて力いっぱい木刀をふりおろす。頭に刀がふれたかと思われる瞬間、ポールは木刀もろとも後ろ向きに吹きとばされた。「頭から気を出して殺気を追い払いました」

一同、シーンとして、あつけにとらわれている。

「このデモンストレーションは、気の力を

知っていただくためにやりました。みなさんには、この気の力を病気の治療に使っていただきたい」

気は特定の人の超能力ではなく、呼吸している生物すべてが持っているエネルギーで、生命力と同じ。あらゆる動物、植物すべてがこのエネルギーで生かされている。

病気は気が病んで全体のバランスが崩れているから起こる現象だから、不足の気を補ったり余分の気を抜いたり、スムーズに流れるようにしたりする。

そのテクニックを伝授するのが、このワークショップの目的である。

呼吸によって強い気を作り、それを体内に入れて内臓の中までゆすってしまう。がん細胞を組織から離してしまう。エネルギーを入れて動かない手を動かしてしまう。

メスも薬も使わずに呼吸だけでそれほど効果があげられるという説明を、メスを持って治療する医師たちが黙って聞いている。

新倉氏の指導で、基本的な治療法の実習が始まった。

「そうです、両脇から出る気をうまく前に送ってください」

2人組んで、お互いに気を送り合う練習。

そうして、やがて病人に気を送るようになるのだろうか。

「私はニセ医者です。ここには本当のお医者様がいらっしゃる。どうかこの方法で病気を治していただきたいのです」

●気は愛

空手、柔道、剣道、その他、ありとあらゆる格闘技を勝ちぬいてきた新倉氏は、いくら勝ってもつねに挑戦される王者の虚しさ、孤独、耐えがたい寂しさをよく知っている。

「人を倒すのでなく助ける気だけを作りたい」

ミシガンの道場の壁に、「気のクラスはがんなどの重病を治す研究をしています。お知り合いにそういう方がいたら先生にご相談ください」の貼り紙を出したのはもう5年も前のことだ。アメリカに渡って10年目。殺気の出し合いで生きる格闘技の生活に、疑問を持ち始めた頃だった。

がん、筋萎縮ジストロフィー、脳梗塞による半身不随、骨や筋肉の異常、幼児の発

(続く)

育不全、視力低下、その他、難病奇病に苦しむ人びとが、新倉氏のことを口伝てに知って次々と訪れた。

「たくさんの病気の方に、私の気は育てられました。初めての病気が現れるたびに、どういうふうに入気を入れようかと考え続けるのです。そうやって考え出した方法が、今は、一万種以上あります。それでもまだ、新しい方法を考えなければならぬ病気に遭遇します」

病気との闘い。格闘技のチャンピオンベルトからは与えられない喜びが新倉氏をますます気の研究にかり立てた。治った人たちの感謝、やさしい人たちとの出会い。それは人と人がいたわり合う愛の世界だった。新倉氏は、自分の気のクラスのパンフに書いた。

「気は愛です」

●医学の概念の拡大

オハイオ大学医学部小児精神科の一室で、幸泉久子博士やパット・フォアマン博士らと雑談した。

ワークショップの始まる前のひととき。週末で室内に人気はなかった。

お二人とも、気のクラスに出るためのラフなスタイル。

古代からずっと、人間は病気と闘ってきた。病気の知恵の蓄積は膨大なはずだ。19世紀実証科学主義の範囲で発達してきた現代医学は、それ以前の実証できない医学を無視して発達してきた。

医療テクノロジーが発達したおかげで、病院にはハイテク医療器械がどんどん導入されている。

何億年前とそれほど変わらない肉体をかかえている病人のほうは、その最新の器械にひるんでいるとはいえないだろうか。医療費も高くなるだろうし、人間よりも器械に判断されることの恐ろしさが、人びとの健康意識を刺激している。

エクササイズ、ダイエット、栄養剤、瞑想……病気を引き起こす心身のストレスをうまく解消したいというニーズに合わせて、ヘルシーなライフスタイルの情報が世界中に飛び交っている。

20世紀は健康法と環境対策で幕を閉じようとしている。

現代医学のメッカである大学医学部の臨床医学者たちが新倉氏を招いて気のクラスを設立したことは、20世紀末の現象のひとつといえよう。

「教授も学生も未来の医学としての気に、大きな関心を持っています。もちろん関心を持つのは気だけでなく、もうひとつの医

学 (alternativemedicine) として、特に東洋医学の知恵の見直しは積極的に行っています。医学が宗旨変えをするのではなく医学の拡大だと考えたほうがいいでしょう。私たちの学部のチェアマンは、ワークショップの設立に反対しなかったばかりか、会場としてジムを無料で貸してくれました。現在、資金援助を各種のグラントに申請しているところです」

幸泉博士の口調は熱っぽく、フォアマン博士も何度もうなずく。

どんな人たちがワークショップに参加していらっしゃるのですか。

幸泉 気のワークショップが始まったのは今年の1月末です。(オハイオの)コロンバスを中心とした精神科医の会の会員に開設を知らせたもので、参加したのは精神衛生の分野で働いているセラピストやヒーリングの専門家が主です。

幸泉先生は児童精神科の臨床医として、実際に治療に気を使っていらっしゃいますか。

幸泉 ワークショップがまだ始まったばかりで日が浅いので、たくさんの治療の例はありませんが、多動性症候群の9歳の男の子に使ってみました。落ちつきがなく、いつも動きまわっている子どもなのですが、胸に手を当てて気を送ってみますと、すぐに静かになってリラックスしました。

フォアマン 新倉先生は、不眠症にも効くかもしれないと言われました。

幸泉 私は気だけでなく、中国医学も勉強しています。ライフスタイル、気分、季節など、いろいろな条件を考慮した医学が必要ですよ。

フォアマン 自然とのハーモニーは重要です。西洋では身体の中側にだけ病気の原因を探しましたが、東洋では自然との不調和の部分を調整して調和させる。それがヒーリングになりました。医者に頼らず、ライフスタイルを整えたのです。

いま、ホリスティック・プラクティス（総合医療法）と呼ばれているものに通じますね。

フォアマン そうです。今月、ここで開催される「ヒーリング・コネクション」というワークショップでは、祈りによるヒーリング、瞑想とリラクゼーション、中国医学と気、整体、障害をプラスに変えてコミュニケーションを得る方法、リズムによるヒーリングなどがテーマとして取り上げられています。

中国医学での気は、新倉先生のワークショップの気と同じですか。

幸泉 考え方が違うと思います。中国では経絡ということを行い、その交差するつぼから治療するようですが、武道から入られた新倉先生は、身体の中の部分からでも強力な気を出し、その力で病気を治そうとしていらっしゃるようです。

中国では、気は情報を伝達するので、気を出す人の思うことがエネルギーの結果として実現するという事になっています。バイキンを増やして殺気を送るのも、逆にバイキンを殺して病気を治すことも、同じエネルギーなのです。思うことが伝わって実現するので、同じ気で相手の首をしめることも肩こりを治すこともできるのです。祈ることが、だから効力をもつのです。

フォアマン クリスチャンの祈りも同じです。祈ることでバクテリアを殺すのです。祈りは気に通じます。

中国医学では、気のほかにもどんなアイデアに興味を持たれましたか。

幸泉 身体の経絡を使う内臓の治療がとても参考になります。それならば、脳につながる経絡を使って、うつ病などの精神病を治せるのではないのかというのが、私のこれからの課題です。おもしろいことに、中国医学には、うつの概念がありません。悲しみとかはありますけど……。

本当に、私たちの知識は大河の中の一滴の水でしかないくらい、生命の中身は奥深いと思います。

私の父は西洋医学の医師でしたが、X線と同時に、ハリ灸や指圧も治療に使っていました。無料でね。父の死後、ノートを見たら、経絡、指圧などが詳しく書いてありました。今私が、西洋医学を学んだあとで東洋医学を学ぶようになり、父と同じ道を歩いたことになりました。これは偶然ではなく、父の意志だという気がします。

フォアマン 遺された知恵を使うことは大切です。時間と犠牲のあとに蓄積されたものですから。

気の出るビデオ、本などもあるが、絵でも字でも音楽でも踊りでも、精魂こめて制作したものからは必ず、その作者のこめた気が発散していて、それが見る人、聞く人の心を打ち、何かを変える。

自然の立たずまいも同じ。

物質主義によって盲目になった私たちの視力を取り戻せば、いたる所にある愛の気を、自分で探しあてることができる、確認するオハイオへの旅だった。■